

### 熊澤蕃山の女性教育論

鬼頭孝佳（名古屋大学文学研究科博士後期課程）

熊澤蕃山（1619-1691）は江戸時代初期の儒学者であり、岡山藩政に関与するも、晩年は『大学或問』が幕府の不興を買い、古河藩で蟄居謹慎のまま生涯を閉じた。井上哲次郎『日本陽明学派之研究』により、陽明学派と分類されることもあるが、「時・処・位」に応じた“実践”を媒介として、諸学説を折衷した思想家と目される。熊澤蕃山の女性教育論は、「詩経周南召南之解」、「源語外伝」、「女子訓」から成り、いずれも書誌学的な考察が付された上で、『蕃山全集』（正宗敦夫編纂・谷口澄夫・宮崎道生監修、名著出版）に収録されており、本報告でも底本とする。

熊澤蕃山の女子教育論については、中泉哲俊（1966）『日本近世教育思想の研究』吉川弘文館、今井源衛（1974）「女子教訓書および艶書文学と「源氏物語」」『源氏物語の研究』（阿部秋生編、東京大学出版会）、笈久美子（1982）「比較史研究」『日本女性史』（3近世）（女性史総合研究会編、東京大学出版会）、神原邦男（1983）「熊澤蕃山の思想」『就実女子大学研究紀要—一般教育』（2）、池田仁子（1988）「熊澤蕃山の「女子訓」について」『日本歴史』（476）、浅沼アサ子（1989-1993）「熊澤蕃山の女子教育論に関する考察 1~4」『東京家政学院大学紀要』（28-33）、宮崎道生（1990）『熊澤蕃山の研究』思文閣出版、池田仁子（1991）「熊澤蕃山の「子育て像」」『日本歴史』（518）、池田仁子（1992）「熊澤蕃山の女性観」『季刊日本思想史』（38）、遠藤マツエ・正保正恵（1992）「近世における家族関係規範に関する基礎的研究」『日本家政学会誌』（43-9）、中野節子（1997）『考える女たち』大空社、江口尙純（2014）「詩経解釈学史より見た熊澤蕃山」『詩経研究』（36）などがある。諸研究の動向として、①熊澤蕃山の女性教育論が封建的な儒教イデオロギーに止まり、内容も良い嫁・母を作る目的に収斂するのか、②「時・処・位」論と女性教育論はどのように関連しているのか、③誰を対象とし、何を目的とした著述なのか、④詩経・源氏物語註釈として如何なる価値を持つのか、という点に主眼が置かれている。

本報告では、池田（1992）の、伝統的保守的な封建的一般道徳と社会改善的・斬新的な社会経済論の「矛盾」という指摘を足掛かりに、しかし蕃山の主観的意識のうえで、この「矛盾」がどのような内在的な論理に基づいて結合していたのかを改めて考察したい。というのも、この「矛盾」に関わる内在的な論理の把握によって、儒教が「良き」嫁・母役割を再生産するだけの、単なる復古イデオロギーにすぎないのか、それとも儒教が「経世致用」の学であるならば、その現実との関わり合いの中で、「時・処・位」論のような、新たな社会体制を概念的に準備する概念装置ともなり得るのか、その一端を明らかにできると考えるからである。そして、この時、儒学の本質が“聖典”解釈学の営為である以上、そもそも経典とはどのテキストを指すのか、経典の「本義」とは何であるのかは、常に論争的であり、ここに伝統と革新の「矛盾」の運動の源泉を見ることができると考えるのである。